

長谷川武次郎に協力した外国人たち

ちりめん本の出版を支えた外国人

学生人気 No.1
ラフカディオ・ハーン

工藤真央



開国後、諸外国と再び交流を持ち始めた明治初期の日本において、ちりめん本が流行しました。ちりめん本は日本の昔話を外国語に翻訳したもので、当時多くの外国人にお土産として好まれていました。また、当時の日本の風土や習慣を題材とした作品もあり、私たち日本人にとっても、日本の古き良き文化を知るための貴重な資料となっています。ちりめん本の出版の先頭に立った人物といえば、長谷川武次郎(1853-1936)が挙げられます。その一方で、ちりめん本の出版を支え、外国に日本を広めることに尽力した数人の外国人がいました。そのうちの1人が、小泉八雲として知られているパトリック・ラフカディオ・ハーン(1850-1940)です。

ラフカディオ・ハーンは、ギリシャ出身の元新聞記者でした。少年時代はフランス・イギリスで教育を受け、その後19歳でアメリカに渡り、ジャーナリストとして活躍しました。そして、1890年にアメリカの出版社の通信記者として来日。しかしながら、彼は記者としてではなく、英語教師として教鞭を執るなど日本の英語教育の最先端で尽力しました。1896年には日本に帰化することを決め、小泉八雲と名乗ることになりました。その後も教育者として活躍する傍ら、彼は日本文化の研究を続け、海外へ日本を紹介するために様々な著書も書き遺しました。有名な作品としては、耳無芳一や雪女など日本の伝説や幽霊について再話し、独自の解釈を加えて書きあげた『怪談』(1904)や、ハーンによる日本人の精神史解釈が戦後日本の象徴天皇制の誕生に影響を与えたとされる『日本—一つの解明』(1904)などが挙げられます。そして、ハー

ンは長谷川武次郎の出版したちりめん本『日本昔噺』シリーズの英語版刊行に際し、『猫を描いた少年』(1898)、『蜘蛛』(1899)、『団子をなくした婆』(1902)、『ちんちん小袴』(1903)、『若返りの泉』(1922)という5作品の翻訳を担いました。

このように、日本研究が盛んに行われるようになった時代において、ハーンは有名な日本文化の紹介者となりました。彼の活躍のおかげで、日本と世界の距離が縮まり、多くの外国人がハーンのように日本に興味関心を抱いたことでしょう。そして、この活躍が現在の日本と世界との繋がりを構築できたことにも少なからず影響を与えていると考えられます。また、私たち日本人にとっては、外国の方々が日本に目を向けてくれることは本当に嬉しいことです。なぜなら、自国の文化の良さを気付かせてくれたり、その文化を大切にしようという意識を改めて感じさせてくれたりする貴重な機会になるからです。そういった意味でも、ハーンの遺した作品をまず私たちが実際に手にとって読んでみるのが大切だと思います。そして、その作品を外国の方々に伝えることによって、さらに日本と世界の距離が縮まり、お互いを深く理解するきっかけになるのではないのでしょうか。

参考文献

田部隆次著『小泉八雲：ラフカディオ・ヘルン』(北星堂書店、1980)

くどう まお(英米語学科4年次生)